

中国電影大観



クレイジー・ストーン～翡翠狂騒曲～ (瘋狂的石頭／CRAZY STONE)

2007(平成19)年11月4日鑑賞(シネ・ヌーヴォ)

監督・脚本=寧浩^{ニン・ハオ}／出演=郭濤^{グオ・タオ}／チェン・ジェンファ^{チェン・ジェンファ}／劉剛^{リウ・ガン}／劉樺^{リウ・ワア}／連晋^{レン・ジン}／彭波^{ペン・ポー}／除 曄^{シュウ・ジュン} (中国映画の全貌2007配給／2006年中国映画／105分)

…… 300万円の製作費で2000万円の興行収入！ こりゃ、2006年の中国映画界の話題にならないはずがない。そんな、中国では珍しいスピーディーで賑やかなドタバタ喜劇、そして有名俳優ゼロ(?)の映画がコレ！ 劇中のセリフが若者たちの流行語にもなったらしく、その影響力は大！ さあ、そんな映画、日本人にも面白いかな……？

なぜコレが1番手に……？

「中国映画の全貌2007」の開催記念上映の1番手が本作となったのは、この映画が2006年の中国映画界最大の話題を集めたため。ネット情報によれば、2006年は『夜宴』(邦題『女帝 エンペラー』)や『満城尽帯黄金甲』などの時代劇巨編あり、『理髮師』『雲水謠』などの主流系ラブストーリーあり、また賈樟柯監督の『三峡好人』が2006年9月にベネチア国際映画祭金獅子賞を受賞するなど、多くの話題があった。

そんな中、有名俳優ゼロの本作が、わずか300万円の製作費で2000万円の興行収入をあげる大ヒットとなり、同時期に上映中のハリウッド映画を凌ぐ1番人気の国産映画となったとのこと。また、「劇中の多くのセリフが若者たちの間で使われるようになり、流行語にもなった」とのこと。300万円といえは約4500万円(1元=15円として)だから、そりゃすごいもの。さて、それはどんな映画……？

寧浩監督とは……？

寧浩監督は山西省出身で、北京電影学院写真科(撮影科)卒業だが、何と1977年

生まれ。したがってまだ30歳！ ①学生時代に『Thursday Wednesday』で北京大学生映画祭にて最優秀監督賞受賞、②長編デビュー作『香火』は東京フィルメックスと香港国際映画祭 Asian DV Competition でグランプリ受賞、③『モンゴリアン・ピンポン』はベルリンでプレミア上映、そして④この『クレイジー・ストーン～翡翠狂騒曲～』は中国で大ヒットとなると、ものすごい才能の持ち主のようだ。私は『モンゴリアン・ピンポン』を見逃しているが、次のチャンスに必ず観るつもり。1974年生まれシュー・ジンレイの徐 静 蕾など、若手美人女優（監督）だけではなく、寧 浩ニン・ハオのような若手男性監督にも注目しなければ……。ちなみに、彼らは第7世代監督と呼ぶの……？

会社の再生は翡翠から

この映画の舞台は重慶。ある工芸品工場は今倒産寸前で、従業員への給料も不払い続き。そんな工場のトイレ跡で、ある日発見されたのが翡翠の原石だ。こりやすごい。これを高く売れば会社の再生も可能。そう考えた謝工場長（チェン・ジェンファ）は、翡翠の展示会を行い、値段をつり上げたくて売却しようと目論んだところから、この映画はスタートする。翡翠の警備を任されたのは、工場のセキュリティ担当者、包世宏パオ・シホン（郭 濤グオ・タオ）だが、もし、翡翠が盗まれたりすれば、「会社の再生は翡翠から」という目標が吹っ飛んでしまうから、翡翠のセキュリティが絶対条件……。

翡翠争奪戦に参加するのは……？

馮 小 剛フォン・シャオガン監督の『イノセントワールド—天下無賊—』（04年）はチベット鉄道の列車内で展開される、一匹狼のスリと窃盗集団そして警察官を含めた三つ巴の攻防戦で、メチャ面白い映画だった（『シネマルーム14』276頁参照）が、この映画で翡翠争奪戦に参加するのはダレ……？ それは、道哥ダオ（劉 樺リウ・ファ）を中心とする3人組の二流泥棒と、工場跡地を手に入れたい不動産会社のフォン会長シュー・ジェン（徐 崢）が雇った香港の国際的な大泥棒マークテディ・リン（連 晋）。

さて、これから展開される翡翠の警備に神経をすり減らす警備責任者の包とその部下三宝サンパオ（劉 剛リウ・ガン）と、この2つの窃盗団との攻防戦の行方は……？

キーマン（？）は小 盟……？

翡翠争奪戦のキーマンとして登場する（？）のが、工場長の息子小 盟シャオモン（彭 波ボン・ボー）。

3人組泥棒のボス道哥ダオの女に一目惚れした小盟シャオモンは、翡翠の写真を撮るためと称して、まんまと展示されている翡翠をニセモノと交換することに成功！ そのお手並みの鮮やかさは、まさにオーシャンズ11……？

小盟シャオモンが盗んだ翡翠は当然女にプレゼントされることに。すると、女は大満足だが、それだけでは話はちっとも面白くない……？

🎬 どちらがホンモノ……？ どちらがニセモノ……？

展示されている翡翠を盗もうと思えば、誰でも考えることは同じで、うまくニセモノと交換してしまうこと。したがって、3人組泥棒のボス道哥ダオがそのような考えたのは当然。しかしその場合、ニセモノでも限りなくホンモノに近いものに交換しなければすぐにバレてしまう……。

そこで、道哥ダオが目をつけたのは、いかにもホンモノらしい翡翠を身につけている小盟シャオモンの女。まずはこれを盗み、そしてあの展示室のホンモノとすり替えるのが1番手っとり早い。そう考えた道哥ダオは、早速プロの泥棒らしく、そのための行動を……。

🎬 これ以上の解説は不要！

この映画に関しては、これ以上の解説は不要。あなた自身の目でスクリーン上でスピーディーかつスリリングに展開されるドタバタ劇を楽しんでもらいたい。おっと失礼。このドタバタ劇というのは決して悪い意味ではなく、ホメ言葉として使っているので誤解なきよう……。このドタバタ劇がなぜ面白いのか……？ その理由は明白。それは、みんなが真面目に自分の目的に向けて努力しているから。つまり、この映画の登場人物たちは誰ひとり観客を笑わせようなどと思っておらず、みんな真剣そのもの。例えば、警備責任者の包は前立腺肥大(?)の持病を抱えながら必死に警備しており、その姿勢は見事なもの。また、「二流泥棒」とは第三者が勝手に名づけたもので、道哥ダオたちは「俺たちはプロ中のプロ」だというプライドをもって策を練り、行動しているのは当然。

製作費が300万元と安くて済んだのは、大スターを使わなかったことと、寧浩ニンハオ監督の知恵だけで面白い脚本を書いたから。つまり、映画はカネではなく、知恵(脚本)だということだ。最後にどんなオチが待ち受けているのかについてよく考えながら、この映画の面白さをタップリと楽しもう。 2007(平成19)年11月10日記